

英吉利だより (二)

寺田貞次

二、倫敦大學 University of London.

倫敦では倫敦大學の University College 及び London School of Economics とを觀ました、前者は大英博物館側後側に當て居りまして、地理は Arts の科として置かれてあります、本館を通じて後庭に出ると、本館と並行した、普通住宅式の長い建物が在る、其の中の一部 (Arts annexe 2, room 1) が之に充てられて居ます、間口僅に五間位、三階造になつて居り、外觀極く御粗末である、階段を登ると玄關があつて、右側に講義室がある、Cartography の教室で、南北に細長い室で、北側は直接街路に面して居る、窓の間に黒板をかけ、右側に爐を備へ、日本の學校で普通用ふる學生用机が幾つも並べてある、爐上には歐亞圖をかけ、左側の壁に歐洲圖がかげられ、爐の傍に地圖箱一個を置き、地球儀を置いて居るだけで、別に特種な設備はない、階上 (First Floor) は二室になつて居り、一室は街路に面して廣く他は其後に位して小である、前者は Map-room 後者は教授の控室で、主任 Lionel William Lyde 教授の室である、中央にテーブル一個を置き、周壁に書棚を備へ、地圖など掛けてある、單なる控室に過ぎない。三階 (Second Floor) は普通の講義室、屋根裏の室は Committee room になつて居る、當教室の主任は教

科用書としてよく讀まれる Economic geography の Man and his Markets の著者である L. W. Lyde 氏である、ウインズール (Windsor) 御滞在中で面會の機を得なかつたが、居合はした助教授 C. D. Forde 氏の案内を受けた、氏は未だ極く若い人で、Cartography を擔當して居る、婦人の學生が數名聴講、人口に關する講義で Representation of Population statistics 圖を掲げ、圖法を説明して居た、兎に角此の教室は地學部として、獨立の建物有して居ると云ふに止り、教室の一隅に掛圖の亂雜に散在して居るなど、Lyde 教授は經濟地理學者として知られ其の御講義は如何に立派であるにせよ、餘り氣持のよい研究所とは考へられなかつた。

London School of Economics は Strand と云ふ倫敦繁華の中心に位し、近時の建築で、廣壯である、地理は商業學の一部として設置されて居るので、三階の一隅に當る六十六番室が、夫である、講義室は此の向側に新設中であつたから目下は未だ一定して居らない、掛圖などは廊下の壁面を利用して、地圖掛を設備し、外部を布帛製幕をたらしめて保存して居る、領事館の紹介で訪問 Lecturer の L. Rodward Jones 氏に面會する、氏の室は研究室の隣、助手室を距て、備えた小室で、中央に机を置き、

周壁に書棚を備へて居る、研究室は廣大な一室が之れに充てられ、即ち前述の六十六番室で、入口の直ぐ左側に黒板を備へ、之と相對する壁には天井に達する大書棚を置き、入口の右側の壁には之も天井迄達する、大きな地圖箱を備へ、室内中央には一個の卓子と其周に、四個の大きな製圖臺を置き、其の下臺は抽出を裝置して、地圖箱になつて居る、製圖板は利用の際、引き上げ斜面に保たしむる裝置になつて居る、一製圖臺上には、Black globe が置かれ、幻燈の設備も見受られた、入口の戸には Third, Second and third year geography students only, may work in the room と書けるから、一般には利用出来ないらしく、参考書なども普通のものは一通り備へられ、研究室としての價值は充分に備へて居る様に見受けられる。一室にすべてを網羅して居るので狭隘、眞の研究には如何と考へられた、教授には R. Jones 氏の他に Sir H. J. Mackinder 教授 Mrs. Hilda Ormsby, A. J. Sargent の諸氏が居る、Jones 氏は商業地理、經濟地理 Mrs. Ormsby 氏は General geography を Sargent 氏は Economic geography を講じて居る、殊に Mackinder 教授は、Oxford 大學地理學部最初の Reader であつた方、Britain and the British Seas は其の著として知られて居る、主として Historical geography の方面を講じられ、本年は Historical geography of Continental Europe and the Mediterranean, Historical geography of the British Isles, Ocean and Air Communications 等を講じて居られた、當校の地學部は商業經濟の他の學科と同様重要科目として、講義科目も多數あるから、一寸總講するには

英吉利だより

都合のよい場所と考へた。

此の他、South Kensington に在る Imperial Institute には英國各植民生産物の研究がよく行はれて居り、本館の後方は廣く其の陳列館をなして居る、英領印度を始め、加奈陀、濠洲、南阿等各植民地の生産物が地方別にして蒐集、懇切な説明を施して極く秩序的に陳列され、其の生産地から、製造法に至る迄熟知し得る様になつて居る、陳列館の中央に幻燈を裝置して説明する設備も出來て居り、毎週數回の公開講義も此處に開かれ、小學生などにも時々實地講義をする様にもなつて居る、商品の研究が普通教育上には此上なきよい設備と申して宜しい。

III. Oxford University.

Oxford では地理は他の學科と同様古くから研究されて居た餘り地學史上にはあらはれて居ませぬけれども、英國では之な地學史上に特筆する要あるものと考へて居ります、夫の Nathaniel Carpenter の如きは此の大學に屬し、既に十七世紀頃（一六二五）Geography をかいて居ります、然し地學として設置せられたのは倫敦の地學協會で、單に探險、調査許でなく、地理教育上必要な事を認め、地學協會の盡力で、協會と大學との Cooperation に、一八八七年に地理の Readership が置かれ、最初は Old Ashmolean Museum で、講義を開く事になりました、之が英國に於ける地學の大學に設置された初で、現今 London School of Economics の地學の教授である H. J. Mackinder 氏が Director で Dr. A. Herbertson が Assistant でありました、當時既に發達して居ました獨逸の伯林や、埃國 Wien

の地學教室を理想として、一九〇五年同じく、地學協會の骨折で特別の教室が建設された、夫が現今の *School of Geography* で、*Broad Street* 四十番地に在ります、地學協會の盡力で出来たものだけあつて、建物は赤瓦の町舎式で何さなう倫敦の地學協會を彷彿せしめます、オクスフォード大學本館の西約三町の處に位し、廣漠たる園地を控え、閑雅な處ではあります、訪問しましたのは三月の下旬でありまして、未だ少し寒くありましたが、晴れ渡た空に桃花の咲き綻べる何とも云へぬ爽快な感じに、玄關前の天氣圖又何さなう地學教室らしい感を起させました、助教授の Baker 氏の案内で縦覽する、*Ground Floor* は玄關、圖書室、*First Floor* (二階)は教室を始め、主任室、製圖室、地圖室、*Second Floor* は教授研究室並に地圖所藏室になつて居り、地學協會の建物と同様、極く複雑に出来て居る、戸を排して入るゝ所謂玄關、組木床の堂々たる室で、中央に大卓子が一つ置てあり、下臺は抽出を備へて居る、地圖箱らしい、兩壁には高大な、掛圖箱を設備し、正面の壁には地圖がかけてある、*Universals*、*Cosmographia* *Secundum* *philomaei* *traditionem* *et* *americi* *vespreii* *Alibonque* *Instructiones* (Verlag der Wagner'schen *Universitäts* *Buchhandlung*) 其の奥は圖書室で、稍廣く、天井高く左側に階段を設けて、二階に通する様になつて居る、室の周圍には高大な書棚を置き、部類を別けて、整理して居る。日本の部を注意したが貧弱で、案内記の類が数部あるに過ぎず、地理書については C. B. Milford 著の *A new geography of Japan* (Japan Gazette Press 明治三十八

年版)が一冊あるのであつた。階段のみ壁に高く天井に達する、大きな日本帝國の模様が眼を驚かす、朝鮮、臺灣迄も具備して居る、何せ日本島に限てこんな大きな模型を造たものか、尋ねるゝ日本政府からの寄贈であるゝ、多分置き場に窮して、此處に掲げたものであらう、最初の Reader であつた、Mackinder 氏の寫眞も注意を引く、階上は此の圖書室の周が細い廊下になつて居り、丁度地學協會で見ると、書棚が並べてある、一般地學に關するもの、經濟人文地學に關するものが此處に置かれて居た、古い本ではどんなものを集めて居るかを調べた處偶然既に何度も申した Nathaniel Carpenter (1635) の地理書が眼についたので少なからず興味を引いた(革表紙の古本)。廊下の左側に二室ある、一室は小さく Reader の室である、入口の天井に、Alps 全圖が圓形に組合はして電燈の筈に裝置してある、地圖の利用も此處に至ては少なからず遺憾である。室は方三間、爐を設け机を置き、周壁は書棚、地球儀等で飾られて居る、好研究室である、室の隣は講義室で二方硝子窓を備へ公園と街路とに面し見晴のよい明るい室である、新しいだけに机萬端がきれいで氣持がよい、入口の右側に黒板を備へ、教壇は一段高く、廣長く机形になつて居る、黒板の上には地圖掛並に幻燈の裝置が完備して居る、左側の壁には歐洲の色分圖がかけてあつた、(A map of Europe to illustrate territorial changes since 1914, George Philip Co.) 廊下の右側は階段室で、上は三階に通じ、下は玄關に下り得る様になつて居る、階段室に行く中程から廊下は左に曲り、其右側に並んで二室ある、一つは長方形で、中央

にエルク製の長大な卓子を置き、Alpsを始め二三の模型が硝子箱に納めて陳列しており、卓子の下臺は抽出になつて居る、廊下側の壁には書棚をおき、下部はカタログ箱をなし、過去十五ヶ年間の Geographical literature の Card Catalogue を備へて居る、室の左側には爐を設け、爐上の壁には Oxford district の Contour relief model をかけ、右傍に小書棚をおき、年鑑類の蒐集に供して居る、廊下側に對する街路側の壁間には Ejector の標本を置き、室の左側の壁は一帶書棚を以て充たし各國地學雜誌を網羅し Encyclopedia Britannica の類をも備へて居る、地學雜誌中日本のを注意したが見當らぬ、後で次の室に保存されて居るのを發見した、勿論製本として居らない、此處數年來の分は來て居らない、引きつゞき發刊して居るのか、日本の地學雜誌には有益な論文も發表されるから備えて置き度いな、話して居た。此の室には Guide to geographical Books and Appliances (by H. R. Mill, George Philip & Son, 1910); The Britannia Year Book (1913); Dictionnaire de géographie universelle (1899, Paris) Chamber's Encyclopedia; Year book of Scientific and Learned Societies, 1925 (赤表紙) 等一般の調査に必要な書物を備へて居る。

其の次の室は三方外部に接して居る明るい室で、中央に製圖板を置き、周壁に書棚を設け、係員一名製圖に着手して居た、Oxford Press をして地學上必要な地圖、例へばカンパニー使用されて居る各大陸の雨量分布圖であるとか (Mean annual Rainfall) 云ふ類のものはこう云ふ處でつくられたものかと考へた。

英吉利だより

lantern slides の製作、寫眞等も此處で着手されて居る、夫から廊下を引きかへして、三階 (Second Floor) に登る。

三階は云はゞ屋根裏で、天井も低く、狹隘である、細い廊下の側に小さい室がいくつも並んで居る、何れも職員の研究室で戸の表面に名刺がはつてある、案内して下さつた Mr. J. N. J. Pater 氏の室も此處に見受けた、其中の二室は地圖保存室で、抽出を多數にもつて居る地圖箱數個を備え世界各國製の地圖を蒐集して居る、我が地質調査所版の圖も少し保存されて居た、英國内の地圖は別に此室の下に當る二階の階段室内に貯藏されて居る、案内して下さつた Pater 氏は地圖の係で所藏の東洋出版古圖を搜し出し地名の教示を乞はれた、漢字で書てある圖で、支那及び朝鮮の一部を示す圖である、我が國の圖も二三枚あつた、誰の蒐集にや妙な圖を集めたものである。各研究室前の廊下には製圖用の器械や、地學に關する雜誌などが所々に場所を占め壁上には相變らず地學に關する各種寫眞が掲げてある、之で大體縱覽を終たのであるが、流石地學協會の肝煎で成立た研究室だけあつて、完備して居る點は倫敦大學や London School of Economics の比ではない、然も閑靜であり、一般が學問氣分に充ちて居る地に在る事さて、地學研究には好適の場所と考へた教授の如きも最初の Reader は既に述べた H. J. Mackinder 氏で其の Assistant として Dr. A. J. Herbertson が、Dr. G. B. Grundy 氏は Ancient Geography を Mr. H. N. Dickson が Physical Geography を Mr. C. R. Beazley 氏が Historical Geography を講じ、殊に Herbertson の如きは英國有數の人文地學

者で、佛蘭西の Jean Brunet 氏が其の著中に云て居る通り、英國の地學者中では、Ratzel の學說を受ついた一人者で、氏の著「Man and his work」の如きは尙良書として稱揚せられて居り單に英國に於て許でなく、英人の書に人文地學の良著として、獨逸に於ても認められて居る程であり、一九〇五年 Mackinder 氏が倫敦大學に轉す

「Herbertson エヤンバラの人、其地の大學出身、獨逸國ハイデルベルヒに學び、世界人口分布論と云ふ名論文を書き、學位を得、歸英後暫くエヤンバラのワット、カヘーナに教鞭をとり、選ばれてオクスフォード大學に轉す」

るに及び、Herbertson 之に代つて Reader をなり、其の熱心に依り、學部著しく整備し、教授には Dr. Grunby 並に C. R. Keadley 氏の代りに Mr. A. J. Toynebee, Mr. M. S. Thompson の新任を見、尙 Mr. N. F. Mac Kenzie (Surveying 擔當) Miss N. E. Mc Mann, Mr. H. O. Beckit, Mr. A. G. Ogilvie 諸氏の就任があり、オクスフォード地學の基礎が確立しましたが、惜しいかな、Herbertson 氏の天壽がながくなく、一九一五年を以て歿せられ、前後して N. F. Mackenzie 氏を初め、Mr. A. G. Ogilvie, Mr. Toynebee 諸氏の轉任があり、學部は大打撃を蒙りました、然し H. O. Beckit 氏は Herbertson の後をついて Reader をなつ、又 Rev. E. C. Spicer, Mr. James Cosser, Mr. W. G. Kendrew 諸氏の就任があり、現今に至つたのでありますが、然かし自分にまつて最興味を引いた Herbertson が居ないので何となく物足りぬ感に打たれたので、せめて墳墓にでも、展じよう

第四卷 第六號 五十四

尋れた處意外の近くに在る事を發見早速參拜した、丁度教室の西北約二町の處で、Holywell church と云ふ御寺の隣に接せる墓域中に在るのである、墓地の入口から斜に教會堂に通ずる道の右側に位して居り、英國流に土墳を築かず長き一間、幅三尺を劃して綠草を美しく茂らせて居り、歿後間のない爲めか白色花崗岩質の碑石新しく、墓石の銘文も明に讀む事が出来、轉感概に堪えなかつた。

in Memory of
Andrew John Herbertson
Professor of Geography,
in the University of Oxford
Born 1865, died 1915
and of Frances L. Dorothy his Wife
Born 1864, died 1915
who lie buried here
and of Andrew Hunter their son
Born 1894 killed in action May 1917.